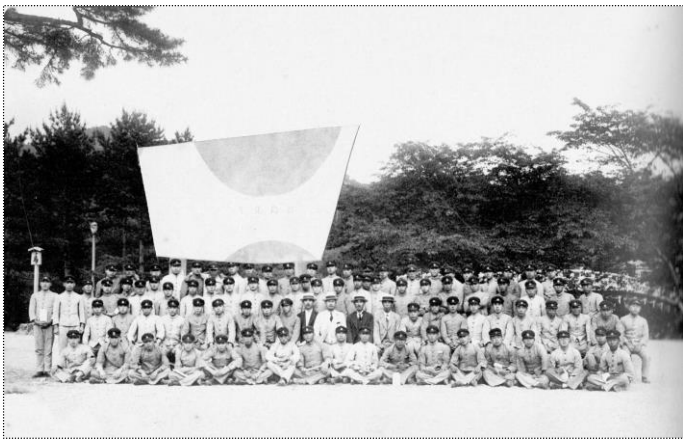




進修同窓会 HP にアクセス

第194号 2025 (令和7) 年11月18日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



中30回関西旅行 伊勢神宮内宮 宇治橋前 (戦後、GHQの検閲に備えたのか、後方の鳥居が切り取られている)

土浦中学校の修学旅行 7 中学30回生の関西旅行 1

1916〔大正5〕年度から始まった関西旅行は、1942〔昭和17〕年度まで続けられ、土中生たちが4年余りの間、一日千秋の思いで待ち焦がれる学校行事となっていました。今号から、1930〔昭和5〕年度に実施された、中30回生の関西旅行記を綴っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

はじめに

1930年度の中30回生の関西旅行については、同年9月発行『進修第32号』に詳細な「関西旅行記」が載せられています。「第一日」・「第二日」を久保田晴次、「第三日」を国友秀勝、「第四日」を中村貞之助、「第五日」を太田惣一、「第六日」を橋爪信常、「第七日」・「第八日」を宮本信三(全員中30回)が、それぞれ担当しています。この「関西旅行記」について、中30回松井喜一郎は、1981「昭和56」年発行『中30回卒業五十周年記念誌』『旅行記余聞』の中で次のように述べています。

「進修第三十二号(昭五刊)の『関西旅行記』は、出発前に指名された筆者達による公式記録である。執筆者は級長クラス、文芸部員、進修会幹事等の中から選ばれたエリートである。さすがにうまいものである。読み返しているうちに思わず感嘆の溜息をもらすほどである。正確な見聞の記録、そして豊富な語彙と美麗な文章、とかく概念文になったり、美辞麗句の羅列に終わったりしがちな当時の作文の傾向と違って、具体的であり説得力がある。……」

さて、「関西旅行記」の末尾は、『四年間、一日千秋の思ひして待ちに待った我等が旅行は恙なく終へたのである。』と結んであるが、果たして恙なく何事もなく終わったのであろうか。

いろんなことがあったのを一番よく知っているのは、他ならぬわれわれ参加者一同である。

その裏話をまとめるようにと励【すす】勉【め】られたので、それらの一端をメモ風に綴ってみよう。

前掲の旅行記が正史ならば、以下はそこには書けなかった隠れた事実を記す外史ともいえるべきもので、正史が主として昼の部の見聞記であるのに対して、夜の部のあの事、この事である。……」今号から、松井が賞賛する「関西旅行記」をそのまま掲載し、「旅行記余聞」を一部加えて、中30回生の旅行の顛末を記していきます。

関西旅行記 第一日(6月1日) 5年久保田晴次

「六月一日、土浦発午後七時八分、平塚【美治 体育】、遠藤【川又 勇三郎 理科】、坂入【要之介 数学】、片岡【保 国語】四先生引率の下に我等一行八十八名の土中健児は関西旅行のスタートを切った。

誰の顔も皆喜びと愉快なる様子が現はれて居る。やがて列車は懐しい水郷土浦町を後にして長いくレールをぐんぐんと呑んで行く。荒川沖を越えて牛久を過ぎた。もうすつかりあたりは暮く【暗く】なつた。窓外には村落の電燈がちらちら見えるだけ、多分取手の手前だつたらう。数百のランプが田一面に整然として灯されてあつたのを見た。話によると害虫駆除のための誘蛾燈であつたさうだ。

間もなく上野駅に着く。省線【現山手線】に乗換東京駅に向つた。午後十時二十分東京駅を後にして再び列車は走り出した。新橋、品川、大森、横浜、程ヶ谷【保土ヶ谷】、戸塚等の暗い都市が後に退く。

車中は校歌を合唱するやらトランプ遊びをするやらで仲々騒がしい。其の騒音に混つて『かうづ【国府津】』『かうづ』

と呼ぶ駅夫の声が聞える。もうすつかり東海道の感じがする。而し、あたりは真暗であるから見ることも出来ない。やがて三島【注1】を通過した頃皆静かになる。富士山も見る事が出来ないのが残念。然し帰りに見る事が出来ると思つてあきらめた。もうぐうぐうやつてゐる者もある。口をあんぐりと開いて寝てゐる者もある。あまりねむいので横になった。後は白河夜舟で何も知らない。

泰平の夢をむさぼつてゐる間に列車はどんく走る。ぱつと眼を開いた時は丁度天龍川の鉄橋を渡つて居つた。鉄橋は三千九百六十七尺あつて東海道第一と聞く。あたりはどんく白んで来た。」

【注1】三島

初代三島駅(JR東海御殿場線下土狩駅)。御殿場線が東海道本線の一部であった【明治31】年6月に、三島駅として開通。【昭和9】年12月1日、丹那トンネル開通に伴い、国府津II御殿場II沼津間の新線が全通し、国府津II御殿場II沼津間が御殿場線として分離された。東海道本線のルート変更と同時に三島駅(2代目)が開業したため、初代三島駅は下土狩駅に駅名を変更した。

【注2】天龍川の鉄橋

天龍川に架かる東海道本線の橋で、現在使用されている下り線は1913〔大正2〕年に、上り線は1987〔昭和56〕年に完成したもの。初代天龍川橋梁は1887〔明治20〕年6月に着工、翌年11月に完成しており、当時、国内最初で最長の鋼製鉄道橋梁であった。1913年、東海道本線の複線化に伴って新たに初代天龍川橋梁の横に橋が架けられ、8月に下り線として開通した。全長1,280m。現存する戦前の鉄道橋梁の中では最長のトラス橋。1981年には上り線として使用されていた初代天龍川橋梁が解体撤去され、新しいトラス橋に付け替えられている。

関西旅行記 第二日(6月2日) 5年久保田晴次

「浜松駅を過ぎた頃小雨が降り出した。雨だ。天我等に幸あらんことを祈る。」

誰やら素敵く々と叫ぶ。今浜名湖畔を走
つてゐるのだ。満々と湛えた水。散在し
てゐる島、全く一幅の画だ。未だ小雨は
ちらくしてゐる。少からず落胆した。
やがて名古屋も過ぎた。車中には其処此
処に『さうでおますかへ』なんていふ声
が聞える。もうすっかり関西気分になつ
てしまふ。昨晚の眠りが足りないせい、か
何時の間にかうとくして居る間に【国
鉄参宮線】山田駅【現JR伊勢市駅】に着い
た。時は午前十一時四十分。我等の目的
地の第一歩が印せられたわけである。宇
治山田市は御鎮座以来神領の旧都にし
て、国民崇敬の中心、一ヶ年の参拝者約
二百萬、市は人口四萬四千、官署学校多
く、所謂我が国の聖地である。これから
我等の崇敬し居る、皇祖の御先祖でお在
します【おはします】伊勢の大廟を拝する
のであるかと思へば何となくある異様
な感じが胸にせまつてくる。駅前の松島
旅館で昼食を済ました。その美味しいこ
とと言つたら旅行ならではとても得ら
れぬ味だつた。此処で少し休憩、その間
に南朝の忠臣結城宗広^(注3)の墓に参拝し
た。やがて一同徒歩にて外宮に参拝した。
此の宮は一名、度会の宮とも称し奉り、
豊受大神を祀り、高倉山に鎮座し給ふ。
苑内表参道の側に日清、日露の両役の記
念砲があつたのに気がついた。再び一同
電車^(注4)に乗り内宮に向つた。途中倉田山
に下車して徴古館農業館を見学す。徴古
館は煉瓦及び花崗石造、ルネーサン式の
建築にして内部を十室に分ち、刀剣、絵
画、彫刻、文書等、神宮一切の宝物を始
め、我が国歴史文物の資料が沢山陳列さ
れてあつた。又貴賓室には有栖川宮熾仁
親王、同威仁親王の等身銅像を安置され

てあつた。目にうつる物皆珍しきものば
かりであつた。農業館には農産、林産、
水産、牧畜、養蚕等に関する我が国産業
の沿革並に現状を概観するに足る材料
が山の如く陳列されてあつた。

これから電車で内宮に行つた。内宮は
宇治の神路山に鎮座したまひ、又は鈴の
宮と称し奉り、御祭神は畏くも天祖天照
大御神にまします。森林の中を段々と奥
に進んで行くと清い流れがあつて、大き
な橋が架してある。これ有名な宇治橋で
ある。五十鈴川の流れは清く神々しい。
この橋を渡れば一点の塵埃もなく綺麗
に掃き清められた神苑である。五十鈴川
の流れで手を洗ひ、口を清めれば、自ら
心も体も清らかになる。幾百年経つたか
わからぬ杉檜が素性よくすらりとした
幹を見せて立つてゐる。



二見ヶ浦 紅葉屋旅館

その間を一步々と踏みしめれば自
然と歩調もとれ、身体は何かで縛られて
居るかの如く固くなる。一の鳥居を過ぎ、
二の鳥居をくゞつて神垣の外に立つて

忝【恭】の誤植】しく拝した時、尊さ有難
さ、を泌々と感じ頭は独りで下る。去
るに当つて私は再び神拝して天地のあ
る限り、この聖地にお在しまして皇室の
御繁栄と日出る国を永遠に輝かされん
ことをお祈りしました。何とも言はれな
い気分分で神苑を出て記念撮影をして再
び電車にて二見ヶ浦に行つた。そして紅
葉屋旅館にその日の安住を求めた。」

松井は、久保田の筆を「久保田晴次君
の伊勢神宮参拝の記の素晴らしき」と評
しています。確かに、この旅行の第一の
目的地である伊勢神宮の荘厳さと参拝
の感激とをよく伝えていきます。また、こ
の旅行では皇室関係の聖地巡拝ととも
に、南朝関係の史蹟探訪が大きな目的と
なっていました。が、結城宗広の墓をさり
げなく持ち出すなど、心憎いばかりの筆
遣いです。

久保田は、最後に「そして紅葉屋旅館
にその日の安住を求めた。」と記してい
ますが、一部の生徒たちにとつては「安
住」ではなかつたようで、松井は、その
騒動を次のように書いています。

「……この夜の泊まりは二見ヶ浦の
紅葉館。ここで宇都宮農林【宇都宮高等
農林学校 現宇都宮大学農学部】の生徒との
間で大喧嘩があつた。何でも女学生の問
題から端を発して双方の出入りとなり、
一時はわれわれの宿に押しかけられ、屋
根伝いの格闘となり、そのさまは、まる
で京都撮影所のロケでもやっているよ
うな光景であつた。『男の喧嘩はこうや
るんだッ』とパイさん【坂入要之介先生
数学の先生なので渾名はπさん】に教えら
れて、巻き返しにはるばる相手方の宿舎
である宇治山田市の山田屋旅館へ押し

かけることになる。主謀者は宮本信三君
同道の面々は、池田敏雄、山本美晴、神
林登、宇佐見春雄、渥美福三、河野芳明
君らの兵（つわもの）たち。めいめいが
木刀持参で殴り込んだので、ピストン堀
口を生んだほどの名門？の相手も怖
れて出てこれないところでひとまず
は収まった。……。」

喧嘩の仕方を教える先生も先生です
が、わざわざ電車に乗って、木刀持参で
殴り込みを掛ける生徒も生徒です。警察
署のある宇治山田の町中（まちなか）で
乱闘騒ぎになつていたら、警察署に泊め
られるだけでは済まなかつたことでし
よう。

結城宗広
^(注3) 鎌倉後期、南北朝時代の武将。新田義貞に従
て鎌倉幕府を攻略、義良親王のりよしんのう
後の後村上天皇を奉じて陸奥国白河庄（福島県
白河市）に拠り、のち足利尊氏の討伐に転戦、途
中「延元3」年、伊勢に病死した。

電車
^(注4) 合同電気神都線。1944「昭和19」年から三重交通
神都線となる。神都線は、三重県伊勢市（旧・宇
治山田市、通称「神都」）にあった軌道線（路面電
車）である。山田駅（現JR伊勢市駅）前を起点とし、
内宮までと二見までとの路線があつたが、1961
「昭和36」年に廃線となった。市内間相互輸送の
ほか、国鉄伊勢市駅、近畿日本鉄道宇治山田駅
といった伊勢市のターミナル駅から伊勢神宮、二
見ヶ浦へ向かう観光・参拝客輸送の役割も果たし
ていた。中34回中島武は、1935「昭和10年」2月発
行『進修第38号』「関西紀行」で、この電車を「常
南電車」の兄弟の如く小さい電車で押し込められ
てと記しているが、定員44名の常南電車（本紙第
162号で既述と同様では、土中生一行だけでも鑑
詰めになっていたことであらう。

ピストン堀口
^(注5) 1914「大正3」年、栃木県真岡市生まれ。昭和初期
における日本ボクシング界の象徴的存在で、「拳
聖」と呼ばれた。本名堀口恒男。